

助成年度：平成 29 年度

[所属] 早稲田大学 人間総合研究センター

[役職] 招聘研究員

[氏名] 藤井 紘司

[課題]

不知火海沿岸域における公害被害と地域再生をめぐる環境史研究

[内容]

本研究の目的は、不知火海沿岸域（水俣市周辺及び天草諸島）を対象とし、水銀汚染による暮らしの位相での公害被害の実態を把握し、どのように民俗が変容せざるを得なかったのかを聞き取りにより明らかにすることである。

本研究では、生活環境主義に依拠し、地域住民と自然環境との関わり方の変化を捉える方法論である環境史アプローチを採用している。5回のフィールド調査は計 26 日間にわたり、いくつかの仮説が浮かび上がってきた。

第一に、山の神と海の神（えびす）との合力があつての地域といった証言や、不知火海沿岸の数十にのぼる村落でのフィールドワークを重ねるうちに、山の神とえびすとを同一のアクターが奉っている村落は凝集性が強い傾向にあることに気づいた。他方、異なる場合は社会的な連帯力が微弱であり、村落内の階層分化と関連していることがうかがえた。

第二に、水俣市は同心円状に社会階層に偏りがあり、この空間構造が公害被害の拡大に結びついているという仮説である。この空間構造の変遷を追っていくなかで、地域内のえびす像の多くが水銀汚染を封じる埋め立てや港湾の整備により移動していることがわかった。

以上のとおり、本研究では社会階層と空間構造との結びつきをふまえつつ、えびすを中心的な題材とし、カタストロフィ後の文化変容の様相を明らかにした。